

第4回 夏の学校「日本と遊ぶ - わたしのハンカチ - 」

事業代表者 地域デザイン科学部 教授 中島宗皓

1. 事業の目的・意義

本事業は、「日本の伝統文化へのいざない」をテーマとした講演・実演等を柱に、宇都宮大学教育学部総合人間形成課程の学生はじめ、課程教員の協働による企画・実施を旨とする体験・実践学習教育活動として実施している。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) 夏の学校「日本と遊ぶ」の概要

本年度で第4回目を迎えた今回は、昨年度に続き、「とちぎ子ども未来創造大学」への登録により、小学4年生から中学3年生を対象に、「日本の染色と生活」をテーマに、藍染め抜染の技法によるオリジナルハンカチの制作を行った。

(2) 学生による運営

本事業は、学生の主体的な企画・運営による体験・実践学習教育活動として実施しているが、特に今回は、「藝術文化に親しみ、藝術の創造や、普及を図るための活動」について事前学習を行い、地域貢献を主目的とした文化事業の企画、運営、TA等を通しての実践的学修を行った。



学生によるTA

また、本年度は、学生への技術指導を事前に行い、当日の技術指導に当たらせた。



型づくりを親子で作業

3. 事業の進捗状況

本事業は、11組の小学生と保護者を対象に、平成28年8月7日（日）に実施した。なお、保護者の参加が叶わない児童には学生が付き添った。ナイフの持ち方やハンカチに関わる話などを共有できる時間となればと思い、今回は保護者同伴を原則として募集した。

4. 事業の成果

本事業では、昨年度に続き、日本の伝統的な「躰（しつけ）」をサブテーマにしている。昨年度は、お箸をテーマに「食育（生涯を通じた健全な食生活の実現を図るために身に付ける学習）」を行ったが、日本における躰（しつけ）は、およそ家庭において枠組みが与えられ、やがて日常生活のなかで自らが“しつけ糸”をほどこながら生まれる習慣であることが望ましい。

本年度のテーマであるハンカチは、幼児期より携帯するものとして習慣づけられてきているものの、本学でいえば男子学生のほとんどが持ち歩いていないのが実情である。

◇学生による講話

当日は、ハンカチづくり（実習）の前に、その歴史や携帯する意義などを学生が発表を行った。

トイレのあと、手をふくとき

- 日本
• ハンカチで。
- アメリカなど
• そなえつけのペーパータオルで。




学生1「世界の国とハンカチ」

Q. どうして日本でもハンカチが流行ったの？

A. 日本には「手ぬぐい」があったから！

学生2「日本におけるハンカチ」

小学校時代のハンカチ



私の小学校ときは当時中国流行ったアニメにハマっていました。
そのグッズのハンカチをお母さんに頼んでたくさん買いました。
写真のハンカチは中国の黒猫警長というアニメです。
そのハンカチの生地は100%綿です。

学生3「中国のハンカチ」 (留学生)

ハンカチには、個性(こせい)がある

- * ハンカチの素材(そざい)
→ タオルみたいなもの、うすい布のものなど
- * ハンカチのデザイン
→ 刺繍(ししゅう)、柄(がら) など

学生4「ハンカチのデザイン」

手のカチーフ

ハンド + カチーフ

ハンカチーフ

ハンカチ

学生5「なぜハンカチと呼ぶのか」

ほかにもいろんな せんい がある



学生6「ハンカチの素材」

涙にはそれぞれ理由がある

↓

ハンカチを差し伸べるだけで
気持ちが伝わります！



学生7「ハンカチを手から手へ」

5. 今後の展望

ハンカチを携帯する習慣は、日本独自の文化といえるが、学生たちには「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた躰(教育)の在り方」について考える機会になったようである。

夏の学校「日本と遊ぶ」では、「日本の伝統文化へのいざない」をテーマとした事業を展開しているが、これまでの古典芸能、日本舞踊などに加え、生活文化としての食育、その他「躰の問題」を課題化し、さらに取り組み課題へと具体化する方針である。



最後に、この度は平成28年度「地域連携・貢献活動支援事業」に採択していただき、深く感謝申し上げます。また、「とちぎ子ども未来創造大学」の関係各位ならびに本学教職員の皆様へ、この場をお借りして心より感謝申し上げます。